

粗にして野だが卑ではない！

～「かっこいい」シリーズ ②～

私の次兄は、3歳年上です。小さい時から逆らえない存在で、私にとってとはとても怖い存在でした。果敢に応じた兄弟喧嘩でコテンパンにやられて泣かされた回数は計り知れず、時には畳や床が血に染まったこともありました。

次兄は小さい頃から豪気なところがあって、小学校の時のある日の帰り道に、当時5年生だった彼が6年生と殴り合いの喧嘩になったことがあります。そばで不安そうに見ていた自分に「母さんには絶対に言うなよ」と念を押されました。でも、ほっぺたを真っ赤にはらして帰れば、母親だって何かあったと気づきます。母親の圧力から仕方なく詳細を打ち明けなければならない立場に追い込まれた私は、兄貴からずっと睨まれました。

3歳違いで中学校は入れ替わりでしたが、私が中学に入学して初めて教務室に入ったら、いかにも怖そうな生徒指導担当の先生が話しかけてきました。「お前、〇〇の弟なんだって？ 兄ちゃん元気になっているか？」その先生がそう言うと、他の何人かの先生方も呼応するように、「え、〇〇の弟？」「兄貴と全然雰囲気違うね」「兄ちゃんもなかなかだったからなあ」などと一斉に反応したのです。

奴（兄貴）は有名人だったのか？まあ、どの先生のものもの言いように、それほど嫌みは感じられませんでした。というより、どちらかと言えば、温かみを感じさせました。

しばらくして何度か教務室に出入りすると、教務室の入口の壁に、「破損届」と題したノートがフックに掛けてあるのに気づきました。生徒が、校内の造作物や備品等を壊したりすると、そのノートに詳細を記入して先生に申し出て、自分で用務員さんに頭を下げて直してもらおうことになっていると知りました。

当時は古い木造校舎で、特に窓ガラスは厚さ 3,4mm 程度の薄っぺらな代物だったので、野球のボールなどが当たったり、悪ふざけしたりして体や物が当たると結構簡単に割れたりしたものです。

そしてそのノートを開いて驚きました。昨年度の窓ガラス等の破損で、うちの兄貴の名前がずらっと並んで溢れていたのです。

どれだけのワルだったのだろう。恐るべしハカイダー。「こんな兄貴の弟ということで、この先の中学校生活は、肩身が狭い」と憂鬱な気分になりました。

ところが、いわゆる不良っぽい3年生などから、「〇〇先輩にいろいろ良くしてもらったんで、よろしく！」なんて向こうから挨拶されるし、いかにも優等生とおぼしき3年生の女子の先輩からは、「お兄さんは面白くて優しかったから、みんなから好かれていたよ」なんて言われて、こちらも調子が外れたのでした。

そして、ある日、「破損届」ノートの真相をある先輩が教えてくれた。

「お前の兄ちゃんは自分の責任で窓を割ってなくても、自分と関係なくても、付き合いで友達についていって『俺もやりました』って言って、自分の名前も記入していたよ。本当に壊した当事者にとってみれば、一人で怒られたり謝ったりするより、気が楽だし心強いからね。まあ、あの人の趣味みたいなもんだな。先生方も周りのみんなも、だれもが知っていたよ」なるほど、何たるお人好し。でも何かうれしい気分になったのです。うかつにも兄貴をちょっと見直したと言ってもいい瞬間だったかもしれせん。

結局、中学校時代の次兄に関する情報を集めれば集めるほど、私が家庭で抱いていた兄貴のイメージと学校での彼の評判は、どんどん乖離するばかりでした。そして最終的には「兄貴って、結局いい奴だったんじゃない」との結論に至ったのです。

私の好きな作家に、経済小説の開拓者で直木賞作家の、城山三郎がいます。城山の代表作に、第5代国鉄（現JR）総裁をつとめた「石田礼助」という人物の半生記の小説があります。その本の題名が「粗にして野だが卑ではない」。これは、石田自身が、国会の答弁

で国会議員に向けて発言した、石田本人のモットーです。

「粗にして野だが卑ではない」。言動が雑で粗暴な面があっても、決して卑しい行いや態度をとったり卑怯なまねはしない、という意味です。

石田は、型破りの経営者として名を馳せ、経営難に陥って誰もなり手のいなかった当時の国鉄総裁を、火中の栗を拾う形で引き受けました。そして、どんな困難や障害にも屈することなく、私心を捨て身を挺して、命をかけて国鉄改革に辣腕を振るったのです。そして国会の場で、自分たちの責任を棚上げし、他人事のように身勝手な発言を繰り返す国会議員を、自分は「粗にして野たる人間」ではあるがと自己開示した上で、正論を堂々と述べて、並みいる国会議員をたしなめたのでした。

「粗にして野だが卑ではない」。カッコいい生き方そのものです。歴史上の偉人と兄貴とを比べたら石田礼助公にたいへん失礼ではありますが、あの次兄にも、それと似た”男気“を感じたのは確かでした。

それでも一方で、彼に虐げられてきた暗黒史を、私は今でも決して忘れることはありません。私の頭のつむじの横には、V字のハゲがあります。次兄との兄弟喧嘩で負ったケガの治療で縫った跡です。当時、我が母校の男子は皆坊主頭。そのV字のハゲをみんなにバカにされるのが本当に嫌で嫌で仕方ありませんでした。「Vっパゲ」なんて渾名もつけられました。

俺の青春を返してほしい。他人に優しくても身内に厳しい兄は、確かに「卑」ではない人間とは認めますが、あまりにも「粗」にして「野」過ぎたのではと思います。少しは私にも優しくしてほしいと述懐します。

それでも、いつまでも愛してやまない相手であり、最高の反面教師、最大の永遠のライバルであると思っています。